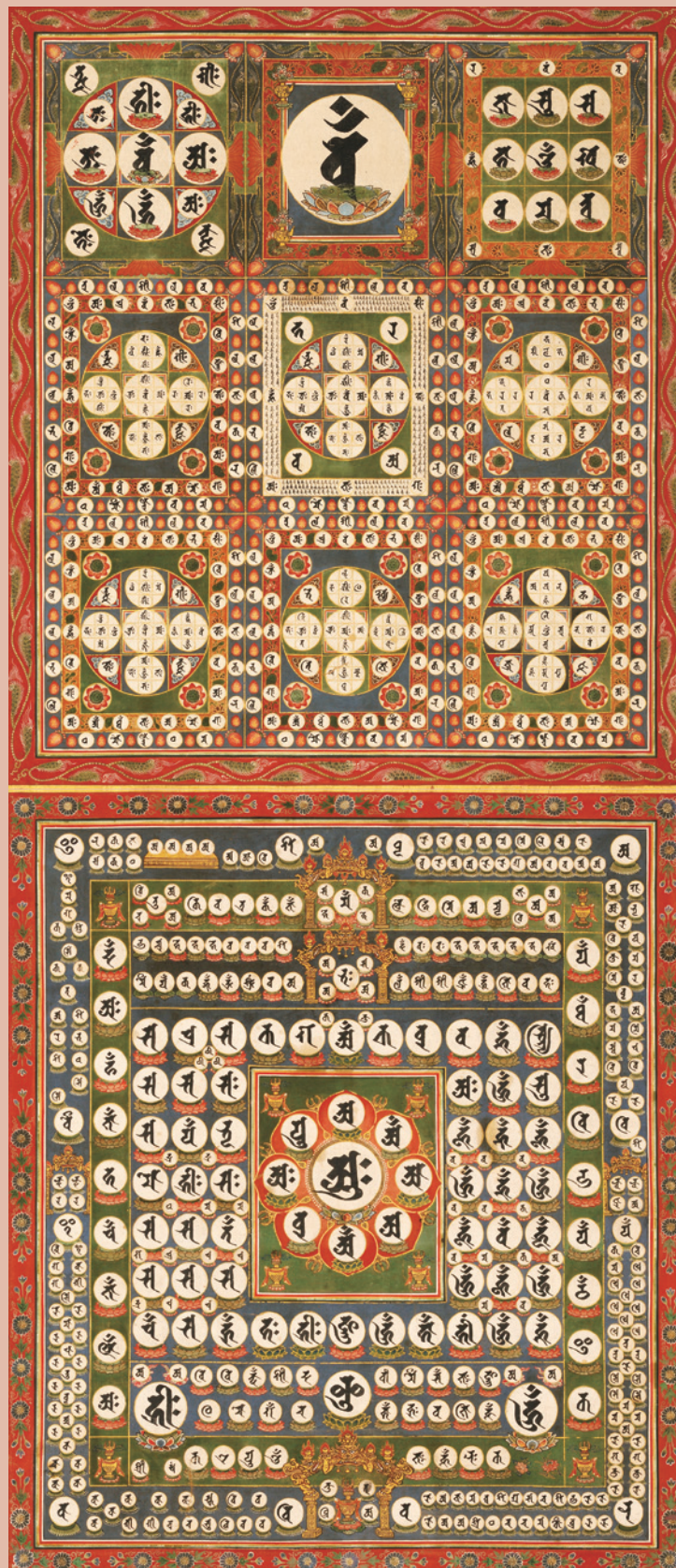


仁和伝法所所報

Bulletin of Esoteric Buddhism Research Centre, Ninnaji Temple

第6号

(令和8年8月31日)



総本山仁和寺 仁和伝法所

仁和伝法所所報 第6号

目次

-
- 1 仁和伝法所新体制の下で
 - 2 真言密教の秘密は、すべて四度にある ～所信にかえて～
 - 3 研究活動報告
 - 3 所員による研究成果の概要
 - 8 令和8年度 個人研究テーマについて
 - 9 令和6・7年度 研究助成 研究成果の概要
 - 12 令和8年度 研究助成事業 採択について
 - 13 伝授・講習会活動報告
 - 16 伝授・講習会の予定
 - 17 梵字悉曇の歴史と現在～児玉義隆作品展～ 開催の記録
 - 18 南山進流声明集—大般若会篇— 刊行について
 - 19 組織(令和8年度)
 - 21 仁和伝法所刊行物

仁和伝法所新体制の下で



総本山仁和寺執行長
真言宗御室派宗務総長
大林 實温

仁和伝法所所報は回を重ね、この度第6号を発刊する運びとなりました。

御室派内のご住職はもとより、真言宗各派の諸大徳さらには研究・教育に携わる多くの皆様に、ご高覧いただいているかと存じます。

後掲にもご挨拶がございますように、この度、大阪支所延命寺住職上田靈宣僧正を新たな仁和伝法所所長としてお迎えすることとなりました。学徳豊かな高僧であります。これからの伝法所の運営にさまざまな知見を寄せ、さらに充実した活動が繰りひろげられるものと期待しております。

さて、ここ数年にわたり、取り組んでいます「御室相承西院流一流伝授」は先般、第7会を修了し、いよいよ後半へと入ってまいりました。貴重な学習の機会を通じて、新たな知見の習得はもとより、日々の修法に反映させて、大師の教えを深め、継承していく基盤としていただければと思います。

また、現在開講中の講習会といたしまして、「澄禅流悉曇講習会Ⅲ」、「法会の実践一大般若会篇一」を行っています。他にも、伝法所は各種刊行物の発行、研究者への研究助成等を実施してまいりました。今後も折に触れて、さまざまな活動を計画してまいりますので、ご関心を寄せて下さいますよう、お願い申し上げます。

伝法所の活動は、私たち僧侶の、日々のふるまいと深く結びついています。小さな組織体ですので、十分な活動が出来ているのかどうか、心許ないところもございます。けれども、その分、機敏に立ち回れるところもあろうかとも感じています。

リカレント学習の場としてはもとより、仕事と学びの機会をうまく並立そして循環させ、事教二相の研究・実践を融合させながら、僧籍者の皆様の資質向上や檀信徒教化に活用していただきたいと願います。

最後に、申し遅れましたが、不肖私、本年3月より二期目の執行長・宗務総長を務めることと相成りました。非力ではございますが、これからも伝法所活動にいささかなりとも尽力してまいりたいと考えております。

改めまして皆様のご理解ご協力をお願い申し上げる次第です。

真言密教の秘密は、すべて四度にある～所信にかえて～



仁和伝法所所長

上田 霊宣

密教が「秘密」と呼ばれるのは、単に教えが隠されているからではありません。言葉だけでは伝え尽くすことができず、師から弟子へ、身・口・意の実践を通して受け継がれる教えだからです。

四度加行、すなわち十八道・金剛界・護摩・胎藏法は、伝法灌頂を受けるための通過儀礼や、教師資格を得るための手続きではありません。十八道によって道場を荘厳し、本尊を迎えて供養する基本を学び、金剛界・胎藏界の修法によって曼荼羅の世界を自らの身心に刻み、護摩によって煩惱を焼き、仏の願いを現実の働きとして表していくものです。即身成仏、我覚本不生、如実知自心、自利利他円満といった密教の教えも、抽象的な理論として四度の外にあるのではなく、一つ一つの作法と観法の中に具わっています。

真言教師は、受職灌頂を受け、阿闍梨として大師の奥義を継承する立場にあります。大切なのは、その資格に安住することではなく、教わった行法を日々繰り返し、本尊瑜伽を通して武道の型の如く心に深く薫習していくことです。作法を整え、印を結び、真言を唱え、観想を重ねるうちに、行者自身が仏の身・口・意へと調えられていきます。仏を外に求めるだけでなく、自らの内に仏の働きを顕し、仏業を実践することこそが即身成仏ということであり、真言師の本分であると考えます。

密教は歴史的にも仏教の最終到達点であり、アビダルマ、中観、唯識をはじめとする長い仏教史の教理と実践が集約されており、その全体を理解することは容易ではありません。しかし、理解の深浅にかかわらず、授かった行法を正しく、絶えず実践することはできます。その積み重ねに禅定（四禅）の力が加わるとき、即身成仏への道が開かれていくのです。

仁和伝法所は、設立以来二十余年にわたり蓄積してきた人材、資料、経験を生かし、真言師一人ひとりの日々の修行を支える機関であると考えています。伝授や講習の開催だけでなく、四度の意味を改めて問い直し、日常の修法に役立つ情報を提供し、師資相承の精神を次代へ伝えることが必要です。

基本に立ち返り、嫡流の自覚と誇りをもって共に精進する。そのための仁和伝法所を築いてまいりたいと存じます。

皆様のご支援ご協力を切にお願い申し上げます。

所員による研究成果の概要

観賢僧正の伝記研究 —仁和寺との関連を中心として—

主任研究員 武内 孝善

令和7年度は、観賢伝研究の一環として、観賢の特筆すべき事績の一つ「御影供の始修」に関連する「仁和寺御影供について—御影供の道場と始修年次—」を報告したい。それは三つの理由による。①仁和寺御影供に関する論考が一篇も見あたらないこと。②仁和寺御影供が勤修されたのは観音院灌頂堂であったこと。③観音院と同灌頂堂の創建年代について、先行研究に疑義をいただくこと、である。

本報告では、五項目—ア：仁和寺御影供はどこで修されたか、イ：観音院の創建年次とその所在、ウ：観音院灌頂堂の創建年次とその構造・規模、エ：仁和寺御影供における「御影供次第」、オ：仁和寺御影供の祭文の作者について—に分かつて検討を加えた。

第一・ア。当初「御影供」なる名称から御影堂で修されたと考えたが、間違いであった。なぜなら、仁和寺で勤修された御影供を「観音院御影供」「観音院祭文」などと記す史料が伝存するからである。仁和寺における御影供は、観音院灌頂堂において勤修されたのであった。

第二・イ。観音院に関する先行研究—杉山信三・福山敏男・古藤真平—は、敦実親王創建説をとるが、その根拠は明確でない。また、観音院の完成を天暦5年（951）3月とし、名称上の成立を敦実が出家した同4年（950）4月とみなす。

筆者は、創建に関する史料を整理し、三説

—④敦実親王説、⑤齊世親王説、⑥重明親王説—を確認した上で、あ敦実説をとる。その根拠は、敦実の子源雅信が建てた薬師堂を再建し灌頂堂と称したのは、雅信の三男済信と娘源倫子であり、その落慶供養の導師は雅信の弟雅慶が勤めたことである。この灌頂堂の落慶には、敦実を祖とする一族の見事な連携が見られたのであった。

観音院の名称の初出は、保安2年（1121）11月、再建なった観音院の落慶供養で読まれた「高野御室願文」に見える延長6年（926）までさかのぼると考える。

では、観音院はどこにあったか。「御室相承記」に「寛平法皇は仁和寺の西側に建てた御所を皇子敦実親王に付属し、敦実がその御所を仏閣としたのが観音院である」とあり、ここにいう「仁和寺の西」は現在、観音堂が建つ位置に比定される。

第三・ウ。仁和寺御影供はどこで勤修されたのか。それは、東寺灌頂院とほぼ同じ構造の建物であった観音院灌頂堂であった。

では、灌頂堂はいつ創建されたか。先行研究—沢登宜久・藤井恵介・古藤真平—は、正暦2年（991）7月の創建とみなす。その論拠は、『日本紀略』の「左大臣（源雅信）仁和寺内の新造の堂を供養す」である。

この「新造の堂」は「薬師堂」であったと記す史料がある。『御堂関白記』寛弘7年（1010）

3月15日条で、雅信新造の堂は長保3年（1001）3月に焼失し、その後再建され落慶供養が行われたときの記録である。そこには「新造された灌頂堂は、もとは源雅信家の堂で薬師堂と称されていた」、「新造なった堂に阿闍梨四口が置かれ、毎年灌頂を修すべきことになった」ので、「灌頂堂と称した」と記す。筆者は、観音院灌頂堂の誕生は、寛弘7年3月であったとみなしておく。

灌頂堂の建物の大きさと堂内の荘厳は、『本要記』所引の「古徳記」（寛弘7年3月落慶の堂）と寛治6年（1092）3月19日付『中御室灌頂記』に詳しい。灌頂堂は正堂と礼堂からなり、正堂は檜皮葺・五間四面（三間四面とも）で、堂内には両界曼荼羅を懸け、その前に胎蔵（東）・金剛界（西）の両壇を立て、東西の壁には真言八祖像が懸けられていた。その基本構造は、東寺灌頂院と酷似していた。

第四・エ。仁和寺御影供では、いかなる儀礼が修されたか。三つある史料のうち、一番詳しいのは『真俗雑記問答鈔』の「仁和寺御影供作法事」である。この「作法事」での特色を三つあげておく。①一座の儀礼のなか、五人の僧が

重要な役割をはたしていた。五師とは、導師・供養法師・祭文師・讃頭・合殺師で、全体の流れは東寺における儀式次第とほぼ同じであった。②導師と供養法師は別の僧が勤めていた。御影供の主役は導師であった。③『東寺御影供次第』と同じく、祭文師が重要な役を担っていた。

第五・オ。御影供の準主役・祭文師が読んだ祭文の作者は平救阿闍梨であった、と記す史料が2つあるが、直ちには信じがたい。理由は2つ。①「祭文」本文が伝存しないため、その内容を確認できないこと。②平救の生没年は未詳であるが、平救が色衆を勤めた記録から、その生年は10世紀後半、没年は長久2年（1041）ころと考えられること。

結語。では、仁和寺御影供はいつ始修されたか。いまだ明確な答えは持たないが、①「観音院灌頂堂」の初出が寛弘7年3月であったこと、②祭文の作者を平救と記す史料があり、平救は1020年から1040年にかけて活躍した仁和寺僧であったこと、を勘案すると、1020年前後に始修されたとみなしておきたい。

（武内 孝善）

古代学協会の仁和寺文書調査資料のデジタル化と「仁和寺編年史料（四）」の編集

研究員 古藤 真平

①古代学協会が平成時代に調査・研究の機会を頂いた仁和寺文書調査で作成した資料のデジタル化、②『仁和寺研究』第6輯（2025年）で（三）を発表した「仁和寺編年史料」の続編（四）の編集に取り組んだ。

①については、令和6～8年度を研究期間とする日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「仁和寺文書調査資料のデータベース構築」と連携する形で、文書の調書と写真のデジタルデータ化を進める方針の下、調書のデジタル化

に重心を置いて作業を進めた。

前年度には、黒塗手箱12箱分（甲上段一・同二・甲中段四・甲下段一・同二・同三・乙上段一・同二・乙中段一・乙下段一・同二・同三）、御経蔵18箱分（第65・72・74・95・97・100・111・123・136・138～143・150・157・158函）について、「書名／形状／料紙／法量／時代／保存状況／内容・奥書・刊記等」のデータ入力を行ったが、内容の考察も必要となる「内容・奥書・刊記等」の入力が進

捗しなかった。そこで、本年度は塔中蔵7箱分について前年度レベルでのデータ入力を終えた後、改めて黒塗手箱12箱分・御経蔵6箱分（第65・72・74・95・97・100函）について「内容・奥書・刊記等」の充実を図った。御経蔵の残りの12箱分と、本年度に一回目の入力作業を行った塔中蔵7箱分について、同様の充実化を図ることが次年度の課題である。

写真のデジタルデータ化については、黒塗手箱甲下段三、御経蔵第74・100・136函、塔中蔵第157函を調査した際に撮影したカラーフィルム8本分について、JPEGデータを作成し、1コマごとに文書箱名・文書番号・閲覧コマ順を織り込んだ12桁の画像番号を付与し、文書1点ごとに作ったフォルダー内に格納する作業

を行った。

②については、来るべき『仁和寺研究』第7輯刊行の際、「仁和寺編年史料（四）」を発表する機会を頂けるような原稿作成を目指したが、延喜5年（905）正月3日「醍醐天皇が仁和寺の宇多法皇のもとへ朝覲行幸する」～同6年（906）9月19日「円成寺（円城寺）からの牒により、同寺の雑務差配に関する太政官符が発出された」に関する記事の編集に留まった。第7輯刊行事業が本格化することへの対応が急務である。ボリューム面の問題だけでなく、質の面についても、これから先克服すべき点が多々出てくることが予想される。編集局を通じて識者からご教示を得つつ、鋭意努力を続ける所存である。

（古藤 真平）

仁和寺の巻数に関する基礎的研究

研究員 西 弥生

真言密教の修法は、真言寺院と世俗権力との紐帯として重要な役割を果たした。修法の効験は雨乞いや御産祈禱のように視覚的に認識しやすい修法もあったが、効験を認識しにくい修法もあったと思われる。いずれの場合においても、願主に効験の認識や実感を促す方法として巻数の進上は極めて重要な意味をもったと考えられる。そこで本研究では、諸寺院における巻数（案）の伝存状況を明らかにしていくための第一歩として、仁和寺の巻数（案）についての検討を試みた。具体的な成果としては以下の通りである。

① 仁和寺における巻数案の伝存状況の把握

御経蔵と塔中蔵のそれぞれにいかなる巻数案が伝存しているのか、またその関連史料としてどのような史料が伝わっているのか調査し、一覧表を作成した。仁和寺の主立った修法は御室によって勤修されてきた

ため、仁和寺の巻数案の多くは御経蔵に伝存していることが明らかになった。

② 巻数の類型との照合

上島享氏によって明らかにされていた巻数の類型に照らし合わせた場合、仁和寺にはどのタイプの巻数が伝存しているのかを分析した。巻数の類型と、巻数の料紙・法量との間には必ずしも相関関係は見られないことを指摘した。

③ 仁和寺の巻数案の特徴についての分析

巻数の体裁・法量・料紙という観点から仁和寺の巻数案の特徴を検討した。仁和寺には醍醐寺には見出すことのできない折紙形式の巻数が伝わっていることが明らかになった。後七日御修法などのように国家的に重要な意味をもつ修法の場合、巻数案の法量も大きく、料紙も意図的に良質のもの

が選択されている可能性があることを指摘した。

④ 近世における観音院結縁灌頂の意義についての考察

近世の観音院結縁灌頂の巻数案は、後七日御修法の巻数案と並ぶ大きさであり、料紙も同様のものが用いられている。そこで、江戸時代の仁和寺において観音院結縁灌頂はどのような意味をもっていたのかを検討した。近世に再興された仁和寺では、北院

御室による初度結縁灌頂を強く意識し、これを模倣する形で勤修することで、中世の伝統を再現しようとしていたのではないかということをも指摘した。

以上の観点から仁和寺の巻数案について考察したが、他寺院の巻数案の伝存状況については未解明であるため、現時点では比較検討ができなかった。それについては今後の課題としておきたい。

(西 弥生)

公共宗教としての密教を考える

研究員 松本 峰哲

今年度の研究において、特に「密教の公共性と臨床宗教師活動—公共宗教論の観点からの考察—」というテーマで論文を作成した。

本論文では真言密教の教理的立場から「公共宗教」概念を検討し、密教僧侶が臨床宗教師として公共空間に参加することの意義と正当性を論じ、ホセ・カサノバの公共宗教論を理論的枠組みとして用いつつ、後期インド密教の世界観、空海の六大思想および「即身成仏」の教義、さらに「三句の法門」に示される菩提心・大悲・方便の論理の検討を行った。

その結果、以下のことが導かれた。

1, 密教の世界観においては、世界の状態はすべてそこに住む衆生の行為（業）の集積として理解される。したがって、苦悩する社会的現実への関与は、世界を変革しようとする密教的実践の必然的帰結である。

2, 密教の目指す理想の世界は、単一・均質的なユートピアではない。空性思想に基づき、それぞれの衆生の縁起に応じた多元的な世界が想定される。これは、多様な価値観・信仰を持つ人々が共存する現代の公共空間への参与と、

原理的に矛盾しない。

3, 密教における悟りとは、特定の教義への信仰ではなく、自己の心の自由を「知ること」である。この認識論的・内証的な悟りの理解は、布教伝道を目的としない臨床宗教師の実践と整合する。

4, 密教において仏に成ること（成仏）を目指す第一義は、自己の解脱のためではなく「他者を救うため」である。三句の法門が示すように、利他の実践は密教修行の究竟（最終目標）として構造的に組み込まれている。

5, したがって密教教義は本来的に公共的な思想であり、臨床宗教師活動への参与は密教の世俗化や変質ではなく、その根本教義への忠実な実践として理解されるべきである。カサノバの指摘する「衰退した宗教の現代における再編成」という評価は、密教には当てはまらない。

6, 宗派的形式への過度の執着が「指」を「月」と誤認する愚を犯すのに対し、菩提心・大悲・方便という三句の法門の核心に立ち返ることが、かえって宗派の境界を超えた普遍的な公共的实践を可能にする。

以上のように公共宗教論の枠組みを用いながら、真言密教の教義的立場から臨床宗教師活動の意義を論じた結果、後期インド密教の世界創造論、空海の六大思想と即身成仏論、三句の法門に示される利他の論理、そして「筏の喩え」に象徴される手段の相対化という四つの視点から、密教教義が内在的に公共的性格を有することが論証された。

臨床宗教師は「臨床宗教師の倫理」と「所属教団の倫理」という二重の規範に従うことが求められるが、密教の観点からすれば、この二つは本来的に矛盾しない。菩提心に基づいて他者の苦悩に向き合い(大悲)具体的な実践によって支援する(方便)という密教の三句の法門は、そのまま臨床宗教師の実践原理と重なり合うのである。

(松本 峰哲)

令和8年度 個人研究テーマについて

令和8年度の主任研究員および研究員による個人研究テーマは以下の通りです。

テーマ名	申請者
観賢僧正の伝記研究―寛平法皇との関連を中心として―	主任研究員 武内 孝善
古代学協会の仁和寺文書調査資料のデジタル化と「仁和寺編年史料」 宇多法皇編の完成	研究員 古藤 真平
巻数をめぐる故実に関する基礎的研究	研究員 西 弥生
密教と根本説一切有部の関係について	研究員 松本 峰哲

(以上4件)

令和6・7年度 研究助成 研究成果の概要

令和6年度 仁和寺研究促進助成(複数年度助成)

仁和寺聖教を取り巻く環境に関する研究 —中世後期における「御室」の盛衰に着目して—

橘 悠太氏

本研究は、前年度の若手研究助成(「仁和寺旧蔵史料に関する基礎的研究」)で得た知見を発展させ、中世後期から近世前期にかけての仁和寺聖教を取り巻く環境について、更なる実態解明を目指したものである。

中世後期の仁和寺御室は、貴種弘底の影響による宮家子弟の入室に加え、応仁・文明の乱による伽藍の全焼も重なり、寺勢は逼迫していた。窮状からの再興を模索する仁和寺にとって、久方ぶりの天皇皇子(後の覚道法親王)の入室は悲願であった。その前後の歴代御室の動向については拙稿「仁和寺御経蔵聖教の形成と展開」(奈良文化財研究所編『文化財論叢V』2023年)において既に触れた通りであるが、こうした中世後期における歴代御室の動向は、聖教の伝来や流出などにも密接に関わると想定される。そこで本研究では、歴代御室をめぐる諸動向を改めて検討し、以下の二つの観点から分析を加えた。

第一に、歴代御室の動向を追究する過程でその重要性が明白となった、任助入道親王と弟子亮淳の活動に焦点を当て、法流と聖教をめぐる実態の解明を進めた。中世後期の仁和寺が門主の早世や不祥事による逐電といった法脈断絶の危機に直面する中、醍醐寺僧であった亮淳が仁和寺へと移り、仁和御流の法流預りという重責を担っていた。また亮淳は、小野・広沢両流における聖教の混同を正し、厳密な目録化を推し進めたが、これは近世の本格的な聖教整理事業に先鞭をつけるものであった。こうした亮淳に

よる法流の中継ぎと聖教環境の整備が、近世の仁和寺再興事業へと直結していったことが本研究により明らかとなった。加えて、仁和御流を取り巻く中世的なあり方がこの時期に変容しており、それが近世以降の小野・広沢両流の関係性を含め、仁和寺に蔵される聖教の形成にどのような影響を及ぼしたのかについても、更なる検討を進めている。

第二に、仁和寺の長としての「御室」のみならず、地域としての「御室」にも着目し、隣接する妙心寺および龍安寺との関係性を解明した。中世後期において衰退の途にある仁和寺に対し、隆盛を極める禅寺が御室領を蚕食していく地理的環境は、聖教の伝来環境を考察する上でも極めて重要である。本研究では岩永紘和氏を研究協力者に迎え、従来は禅宗側の視点から語られがちであった永正年間の所領売買について、仁和寺側の視点から問い直した。その結果、売買の背景には、真乗院宗一の俗縁を介した朝廷との関係性を足がかりとして、妙心寺への寄進が進められた側面が想定された。更に、覚道法親王が仁和御流の正統な継承者として伝法灌頂を実施するための費用捻出という、切迫した事情が大きく作用していたことも明らかとなった。所領を手放してでも仁和御流の相承とその権威を確立する盛儀の実施が、仁和寺再興に向けて不可欠であったといえ、中世後期の仁和寺聖教についても、こうした政治・経済的背景からその形成過程が更に論じられていく必要がある。

(橘 悠太)

中世前期王家における仁和寺法親王の政治的位置 —覚法・守覚を例に—

河村 如乃氏

本研究は、鳥羽～後白河院政期における仁和寺御室の在り方について、王家の政治的動向を踏まえた分析を試みたものである。

従来は、御室は院権力と一体性を有していたという認識のもと、王家論・王権論における御室の在り方について研究が進められていた。それゆえに、院以外の王家構成員と御室の関係性は、具体化されていないという課題がある。また個々の御室についての研究も十分とはいえない。覚法はその生涯において、白河院政から鳥羽院政への転換期を経験しているが、鳥羽院政期王家における位置づけについては、ほとんど注目されておらず、守覚については後白河院との一体性が論じられてきたが、高倉院や安徳天皇を中心とする平家政権側との関係性も検討されるべきである。そこで本研究では、覚法と守覚を事例として、中世前期王家における仁和寺御室の位置づけを考察した。

まず、鳥羽院政期王家における覚法の位置づけについて検討した。摂関家と覚法は血縁関係にあり、王家は高陽院を介して摂関家と結びつき、覚法もまた高陽院を介して王家と交流関係にあった。また覚法が仏事を修したことがわかる二人の院后妃、待賢門院及び美福門院と覚法の関係性について注目した。御室継承は、覚法に対する二人の女院の要請により決定され、鳥羽院政期の後宮の権勢が待賢門院から美福門院へ移ったことで、覚法もその立場を転じたことが明らかになった。

次に、後白河・高倉院政期王家における守覚の位置づけについて検討した。守覚は高倉院のための仏事を中心としながら、安徳天皇の護持も行い、平家政権と親密な関係にあった。従来注目されていた後白河院のための仏事は、院の個人的な申請の範囲において行われたといえよう。後白河院政下にあつて、守覚は建春門院を介して平家と擬制的血縁関係を有し、後白河院政停止中には高倉院・安徳天皇を中心とする平家政権と協調関係にあった。特に、高倉朝における守覚は主として院権力ではなく天皇権力と結びついていたのであり、その背景には、天皇権力護持を求める後白河院や建春門院の意図が想定される。これまで論じられてきた、院権力と御室の一体性については、今後も検討の余地があろう。

白河院政期以降、御室は王家の環の中に位置づけられるが、御室は常に院と一体化していたのではない。院、天皇、女院から、王権の安定性のため、その宗教権力は求められたのである。

本研究の成果の一部は「最勝光院における国母仏事の性格—金沢文庫収蔵史料から—」（『金沢文庫研究』355号、2025年）に公表し、大幅に加筆・修正したものを「中世前期王家における仁和寺御室の位置—覚法・覚性・守覚を例に—」と改題のうえ日本宗教文化史学会第30回大会にて報告した。本助成に採択頂いた仁和伝法所の方々、及び成果の公表にあたり貴重なご意見を頂いた方々に記してお礼申し上げる。

（河村 如乃）

仁和寺所蔵星辰信仰図像・絵画の調査・研究

大岩 雅典 氏

平安時代に成立した北斗曼荼羅は、方形式と円形式の二形式に大別され、一般的には方形式が真言系、円形式が天台系であると考えられている。特に、もっとも流布した形式として挙げられるのが、仁和寺成就院の寛助（1057～1125）が創案したとされるものである。北斗曼荼羅の成立やその構成原理を理解するためには、仁和寺およびその周辺に伝来する作例への理解が不可欠である。

本研究の目的は、①仁和寺所蔵の北斗曼荼羅（円形式の図像一点、方形式の本画二点）の熟覧・撮影・分析、②箱書に仁和寺の名前が記されている山梨県・寿徳寺蔵「星曼荼羅」、仁和寺図像と画面構成が近い福井県・瀧谷寺蔵「星曼荼羅」に着目した、仁和寺を中核とした寺院ネットワークと関わる北斗曼荼羅諸作例の分析の二つであった。以上の作品調査を基盤に、仁和寺における星辰信仰の成立と展開を明らかにすることを目指した。さらに、北斗曼荼羅や星辰信仰にまつわる教学ネットワークの実態についても検討した。

本研究最大の成果は、これまで未調査であった作例五点について、詳細な画像を撮影し、その構成に関する情報を整理した点にある。特に、従来の北斗曼荼羅研究において着目されてこなかった、ある寺院とその周辺に伝来する作例と

いう観点で調査・研究をおこなったことで、北斗曼荼羅研究に新たな方法を提供することができたと考えている。

今回の調査により、現在仁和寺に所蔵される北斗曼荼羅が多様な形式を有していることが明らかとなった。これにより、仁和寺における北斗曼荼羅の形式が一様ではなく、他の寺院との関わりの中で集積されていったものである可能性が高まった。この可能性は、仁和寺が伝来に関わり、醍醐寺由来の構成を有すると考えられる寿徳寺本の存在によって一層補強される。さらに瀧谷寺本は、従来の北斗曼荼羅研究において定型的に用いられていた方形式＝真言系、円形式＝天台系という図式の見直しを迫る作例として注目される。先行研究において東密系円曼荼羅と称されてきた仁和寺円本とともに、真言系寺院における円形式の存在について検討するための大きな手掛かりとなる。

また、今回の成果を踏まえ、北斗曼荼羅の形式伝播と収蔵に関するネットワークが極めて複雑であり、中央と地方の交流までも念頭に置く必要があることが明らかとなった。今回の調査を足掛かりに、京都周辺における北斗曼荼羅をめぐるネットワークのあり方、そしてそれらの地方への展開について、さらに研究を進めていく必要がある。

（大岩 雅典）

※なお、「令和7年度 仁和寺研究促進助成（単年度助成）」採択テーマ「仁和寺上乘院の歴史的研究—中世門跡寺院の構造解明を目指して—」（大田壮一郎氏）については、審議の結果、調査研究期間の1年延長を認めることとなりました。

令和8年度 研究助成事業 採択について

仁和伝法所研究助成事業（若手研究助成／仁和寺研究促進助成）は、優れた調査研究テーマに対し、審査を経て金銭による助成をおこなうものです。真言密教および仁和寺をめぐる学術研究の進展、また仏教文化の興隆に寄与することを目的としています。令和8年度の採択は以下の通りです。

若手研究助成事業 採択一覧

テーマ名	申請者	助成金額
近世仁和寺再興における御影堂の造営と清涼殿部材転用の実態の解明	横山 舜 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 アソシエイトフェロー	46万円
『即身成仏義聞書』の成立について —『即身成仏義聞書附録』をもとに—	若槻 真隆 大正大学大学院仏教学研究科 博士後期課程	19万円

（以上2件、申請者の所属は申請当時のもの）

仁和寺研究促進助成 採択一覧

テーマ名	申請者	助成金額
日本密教における五蔵曼荼羅の展開： 『五智蔵秘抄』にみる阿字と両部不二思想の研究	亀山 隆彦 京都大学人と社会の未来研究院 准教授	38.6万円

（以上1件、申請者の所属は申請当時のもの）

伝授・講習会活動報告

御室相承西院流一流伝授

大阿闍梨 瀬川 大秀 大僧正猊下（総本山仁和寺門跡）
伝授阿闍梨 添野智譲 僧正（元仁和伝法所所長、御室派大門寺前住職）
道 場 総本山仁和寺 御室会館・大広間
内 容 第4会 令和7年 9月 2日（火）・3日（水） 金剛界次第
第5会 令和7年 12月 3日（水）・4日（木） 護摩頸次第
第6会 令和8年 2月 25日（水）・26日（木） 胎藏界次第
第7会 令和8年 5月 13日（水）・14日（木） 八結1

総本山仁和寺を道場に、大阿闍梨瀬川大秀門跡猊下のもと、添野智譲僧正を伝授阿闍梨にお迎えし、御室相承西院流一流伝授を開筵しました。

第2会から第6会まで四度部の伝授がなされ、伝授阿闍梨のご意向により、鈴木義晃僧正（当時仁和伝法所所長）が伝授を担当しました。

第7会からは諸尊法へと移り、伝授阿闍梨ご自身による六観音の伝授がおこなわれました。今後も『八結』に沿って伝授がなされる予定です。



密教学講座 ―西院流へのまなざし―

講 師 西 弥生（仁和伝法所研究員）、松本 峰哲（仁和伝法所研究員）、
赤塚 祐道（仁和伝法所特任研究員）、中村 夏葉（仁和伝法所特任研究員）、
前田 隆照（仁和伝法所准研究員）
会 場 総本山仁和寺 寺務所2階会議室
内 容 第1回 令和7年 10月 16日（木） 事相と教相（赤塚）
第2回 令和7年 11月 20日（木） 仁和寺真乗院孝源（前田）
第3回 令和7年 12月 11日（木） 経典、儀軌、次第（松本）
第4回 令和8年 1月 20日（火） 真言諸流の歴史（西）
第5回 令和8年 2月 19日（木） 現図曼荼羅（中村）

本講座では、真言密教および西院流の理解に不可欠な基本テーマを取り上げ、各講師によるリレー形式で、最新の学術研究の成果を踏まえた講義を実施しました。初心の真言教師が自らの法流を見つめ直す機会となるよう、各講師がテーマ設定や講義内容を工夫し、充実した講座となりました。

法式の講座 ―西院流の荘厳―

講 師	奥 龍弘（仁和伝法所准研究員）
会 場	総本山仁和寺 寺務所2階会議室
内 容	第1回 令和7年 11月18日（火） 法儀の概略、道場 第2回 令和8年 1月23日（金） 道場荘厳、供養 第3回 令和8年 3月10日（火） 修法壇の荘厳、梵音具

西院流による法会儀式の執行に欠かせない荘厳の知識について学ぶ講座を開催しました。奥龍弘先生が基礎から丁寧に解説し、実践に役立つ内容となりました。

声明の講座 ―理趣三昧法会の声明―

講 師	守安 秀行（仁和伝法所准研究員）
会 場	総本山仁和寺 寺務所2階会議室
内 容	第1回 令和7年 12月10日（水） 声明の概説、唄の実習 第2回 令和8年 2月18日（水） 散華・対揚の実習 第3回 令和8年 3月11日（水） 唱礼・前讃・後讃の実習 第4回 令和8年 4月22日（水） 理趣経の実習

仁和伝法所発行『南山進流声明集―理趣三昧篇―』をテキストとし、理趣三昧法会の声明について実習を行いました。守安秀行先生の指導のもと、各曲目の正確な音程と唱法の習得に努めました。

特別講座「基礎から学ぶ梵字悉曇」

期 日	令和8年2月6日（金）
講 師	森 祐敬（仁和伝法所准研究員）
会 場	高野山真言宗 太融寺（大阪市）
内 容	塔婆の種子と真言

仁和伝法所による講習会を全国各地で開催する「特別講座」の第一弾です。今回は大阪・太融寺をお借りして、森祐敬先生による悉曇講習会を開催しました。基礎となる摩多体文、また塔婆に用いる年回忌本尊の種子・真言について実習し、さらに光明真言曼荼羅の制作もおこないました。

仁和寺へのご来山が難しい方々にも多く受講いただき、また充実した内容に満足いただけるよう、今後も「特別講座」の開催を進めてまいります。



その他(講習会開催協力など)

●真言宗御室派肥前支所 教師研修会

期 日 令和7年11月6日(木)
講 師 奥 龍弘(仁和伝法所准研究員)
講 師 補 岩田 大悟(仁和伝法所職員)
会 場 御室派肥前支所 明王院(佐賀市)
内 容 西院流の法儀(一) 一道場とその荘厳—

●真言宗御室派肥前青年教師会 研修会

期 日 令和8年3月8日(日)
講 師 奥 龍弘(仁和伝法所准研究員)
講 師 補 岩田 大悟(仁和伝法所職員)
会 場 御室派肥前支所 健福寺(佐賀市)
内 容 西院流理趣三昧法会の基礎

伝授・講習会の予定

御室相承西院流一流伝授

大阿闍梨	瀬川 大秀 大僧正猊下（総本山仁和寺門跡）
伝授阿闍梨	添野 智譲 僧正（仁和伝法所前所長、御室派大門寺前住職）
道場	総本山仁和寺 御室会館・大広間
内容	第8会 令和8年 9月16日（水）・17日（木）
	第9会 令和8年 12月 9日（水）・10日（木）
	第10会 令和9年 2月17日（水）・18日（木）
	第11会 令和9年 5月19日（水）・20日（木）
	第12会 令和9年 9月 8日（水）・ 9日（木）
	第13会 令和9年 12月 8日（水）・ 9日（木）

澄禅流悉曇講習会Ⅲ

講師	児玉 義隆 先生（種智院大学副学長・教授、智山派永福寺住職）
会場	高野山東京別院（東京都港区）
内容	第1回 令和8年 4月27日（月）
	第2回 令和8年 6月22日（月）
	第3回 令和8年 9月 7日（月）
	第4回 令和8年 10月26日（月）
	第5回 令和8年 12月14日（月）
	第6回 令和9年 2月22日（月）

「両界種子曼荼羅を書く」というテーマのもと、仁和伝法所謹製の用紙（下絵）2種を用いた制作実習をおこないます。澄禅流の書法を正しく身につけ、受講者自身で種子曼荼羅を建立することが目標です。

法会の実践 ―大般若会篇―

講師	奥 龍弘（仁和伝法所准研究員）
	守安 秀行（仁和伝法所准研究員）
会場	総本山仁和寺 寺務所2階会議室
内容	第1回 令和8年 5月20日（水）
	第2回 令和8年 7月 8日（水）
	第3回 令和8年 9月 4日（金）
	第4回 令和8年 10月20日（火）
	第5回 令和8年 11月24日（火）・25日（水）

声明の実習や法式の解説に加えて、最終回では仁和寺において受講者自ら大般若経転読法会を執行するという、大変実践的な講習会です。新刊『南山進流声明集―大般若会篇―』をテキストとして用います。

梵字悉曇の歴史と現在～児玉義隆作品展～ 開催の記録



令和8年6月20日より8月23日まで、仁和寺霊宝館において、初開催となる梵字展「梵字悉曇の歴史と現在～児玉義隆作品展～」を開催しました。

本展は、梵字悉曇の歴史と現代における意義について、仁和寺に所蔵される貴重な寺宝に加え、日本を代表する悉曇学の大家・児玉義隆先生の作品を通じて紹介するものです。

会場では、児玉先生が制作され、仁和伝法所「悉曇灌頂」において実際に懸け用いられた曼荼羅や真言八祖の梵号などを一斉に展示し、灌頂道場の模様を再現しました。

優れた造形美が注目され、近年では美術やデザインの分野でも親しまれるようになった梵字。その魅力を存分に体感していただける展示となりました。

7月22日には関連企画「児玉義隆先生ミュージアムツアー＆「梵字を書く！」セミナー」が開催

されました。児玉先生による展示解説に加え、智満流・澄禅流の書き分けや種子・梵号の書写実演などがおこなわれ、大変盛会となりました。



【開催概要】

会 期 令和8年6月20日（土）～8月23日（日）〔月曜休館〕
会 場 総本山仁和寺 霊宝館
拝 観 料 大人800円、高校生以下無料（次世代への文化支援として）
主な展示品 〈仁和寺所蔵品〉

尊勝陀羅尼梵字経（唐代・重文）、孔雀経（平安時代・重文）

別尊雑記（江戸時代）、両界種子曼荼羅（江戸時代）、十二天屏風（江戸時代）

〈児玉義隆先生作品〉

両界種子曼荼羅、仏頂尊勝陀羅尼輪、熾盛光曼荼羅、紺紙金泥両界種子曼荼羅、

両界悉曇曼荼羅、真言八祖梵号

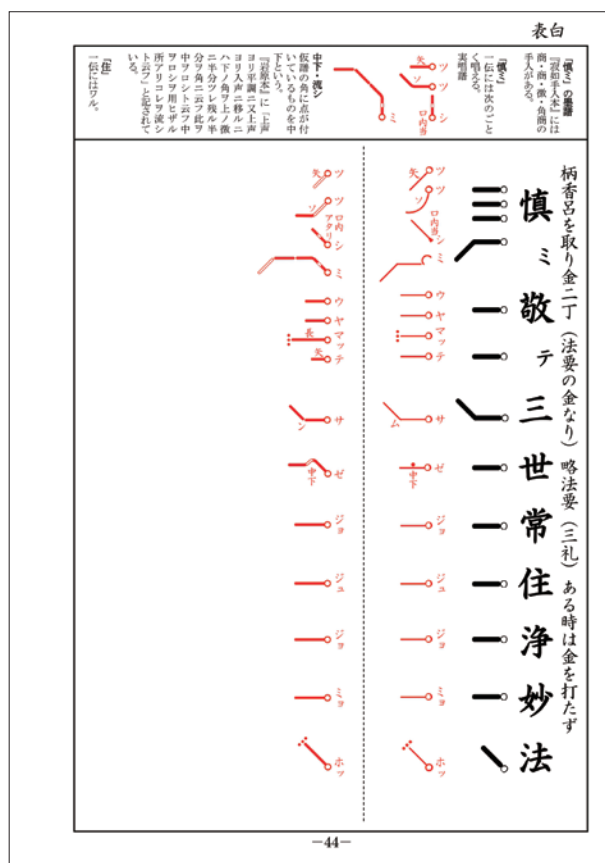
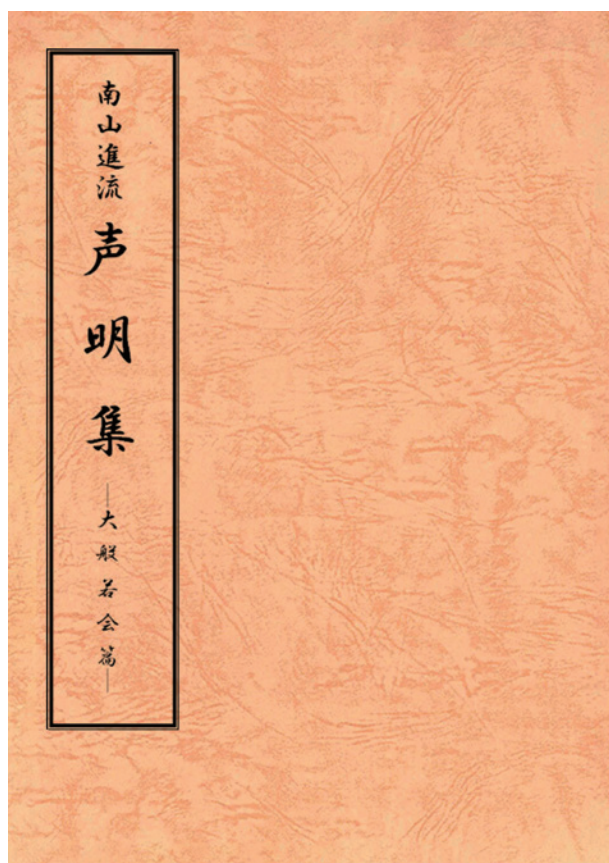
南山進流声明集 —大般若会篇— 刊行について

仁和伝法所声明研究会では、教則本『南山進流声明集—大般若会篇—』を本年3月21日に発行いたしました。『理趣三昧篇』に続くシリーズ第二作となる本書には、大般若経転読法会の執行に必要な声明の全曲目を収載しています。音の動きを分かりやすく示す「実唱博士」を本博士（墨譜）・仮博士（仮譜）に併記するほか、実唱に関する口訣や曲節の違いについても注釈を付しています。

声明の基礎たる学びのため、また日頃の研鑽のため、きっと本書をお役立ていただけるはずです。ぜひお求めください。

収録曲目

三礼、如来唄（中段釈迦）、散華、対揚、表白、発願、四弘、仏名、教化、別願、廻向、結願事由、神分、総礼伽陀、文殊讃、廻向伽陀、称名礼



南山進流声明集 —大般若会篇—

潮 弘憲 監修

仁和伝法所声明研究会 編

B5判、193頁、並製本

価格 8,000 円

組織（令和8年度）

所長	上田 霊宣 UEDA Reisen 昭和 32 年（1957）生 仁和密教学院講師、御室派・延命寺住職
主任研究員	武内 孝善 TAKEUCHI Kozen 昭和 24 年（1949）生 博士（密教学） 高野山大学名誉教授、御室派・円満寺徒弟 ■著書『ご宝号念誦 その成り立ちとところ』（春秋社、2025 年） 『空海伝の研究』（吉川弘文館、2015 年）
研究員	古藤 真平 KOTO Shimpei 昭和 35 年（1960）生 文学修士 公益財団法人古代学協会研究員 ■著書『宇多天皇の日記を読む』（臨川書店、2018 年） 論文「仁和寺編年史料（三）」（『仁和寺研究』6、2025 年）
	西 弥生 NISHI Yayoi 昭和 52 年（1977）生 博士（文学） 種智院大学人文学部教授 ■著書『中世密教寺院と修法』（勉誠出版、2008 年） 論文「江戸前期の仁和寺」（『仁和寺研究』6、2025 年）
	松本 峰哲 MATSUMOTO Minenori 昭和 46 年（1971）生 修士（文学） 種智院大学人文学部教授・臨床密教センター長、御室派・神護寺副住職 ■監修『自由に生きる練習 ブッダに学んだ“とらわれない”考え方』（河田真誠著、綜合法令出版、2025 年） 著書『構築された仏教思想 ツォンカパ』（佼成出版社、2021 年）
特任研究員	赤塚 祐道 AKATSUKA Yudo 昭和 46 年（1971）生 博士（文学） 種智院大学密教資料研究所研究員、新義真言宗・徳蔵寺住職 ■論文「浄厳『秘密儀軌』と御請来経の關係」（『豊山教学大会紀要』54、2026 年） 「仁和寺における伝法院流相承をめぐる」（『密教学研究』55、2023 年）
	苔米地 誠一 TOMABECHI Seiichi 昭和 27 年（1952）生 博士（仏教学） 大正大学名誉教授 ■著書『平安期真言密教の研究』（ノンブル社、2008 年） 論文「高野山開創説話について 一十・十一世紀の丹生津姫説話一」（『密教学研究』57、2025 年）
	中村 夏葉 NAKAMURA Kayo 昭和 55 年（1980）生 博士（文学） 大正大学仏教学部講師、善通寺派・真福寺徒弟 ■論文「新安祥寺流曼荼羅の図様系統について」（『密教図像』44、2025 年） 「新安祥寺流曼荼羅に関する基礎的考察」（『密教学研究』56、2024 年）
	中山 一磨 NAKAYAMA Kazumaro 昭和 44 年（1969）生 博士（文学） 大阪大学大学院文学研究科招へい研究員、真宗大谷派・西福寺住職 ■監修『寺院文献資料学の新展開』全 12 巻（臨川書店、2019 年より） 論文「寺院文献は資料学たりうるか ―「書群」で捉える経蔵分析―」（『仏教史学研究』67-1、2026 年）

准研究員	堀内 規之 HORIUCHI Noriyuki	
	昭和 41 年（1966）生 博士（仏教学） 大正大学仏教学部教授、豊山派・延命密院住職 ■著書『済暹教学の研究』（ノンブル社、2009 年） 『富田敦純『新義真言宗史』を読む』（ノンブル社、2023 年）	
	有瀬 光崇 ARUSE Koshu	
	昭和 49 年（1974）生 御室派・國分寺住職 ■論文「真光院俊亮寂如の事跡とその周辺」（中山一磨監修・山崎淳編『寺院文献資料学の 展開 第九巻 近世仏教資料の諸相 II』臨川書店、2020 年）	
	上田 隆雄 UEDA Ryuo	
	昭和 63 年（1988）生 御室派・延命寺副住職	
	大橋 聖本 OHASHI Shohon	
	昭和 43 年（1968）生 御室派・大福寺住職	
	奥 龍弘 OKU Ryuko	
	昭和 51 年（1976）生 仁和密教学院学院長、御室派・観音寺住職	
職員	泰地 翔大 TAIJI Shota	
	昭和 60 年（1985）生 修士（歴史学） ■論文「真言宗の門流分化と後七日御修法」（『洛北史学』23、2021 年） 「真言寺院仁和寺の成立」（『古代文化』72-3、2020 年）	
	沼野 圭翠 NUMANO Keisui	
	昭和 47 年（1972）生 修士（密教学） 御室派・高照院住職 ■論文「済暹の「幻」解釈について」（『密教学』58、2022 年） 「鳳潭と妙瑞の圓音解釈について」（『密教文化』238、2017 年）	
	前田 隆照 MAEDA Ryusho	
	昭和 58 年（1983）生 修士（文学） 御室派・金剛院徒弟 ■論文「真乗院孝源の出家とその背景」（『仁和寺研究』6、2025 年） 「古典からみる仁和寺」（『京都橘大学文学部歴史文化ゼミナール』5、2018 年）	
	森 祐敬 MORI Yukei	
	昭和 55 年（1980）生 仁和密教学院講師、御室派・徳成寺住職 ■編著『智満流梵字悉曇習字帖』（仁和伝法所、2019 年）	
	守安 秀行 MORIYASU Shuko	
	昭和 47 年（1972）生 仁和密教学院講師、御室派・西方寺住職	
職員	泰地 翔大 （准研究員と兼任）	
	岩田 大悟	

仁和伝法所刊行物

1	広沢西院流御室相承 西院流八結(上下2冊)	仁和伝法所 編	50,000円 ※在庫僅少 (品切れ後、一旦頒布停止予定)
2	広沢西院流御室相承 十八道念誦の次第 解説	仁和伝法所 編	3,000円(本派2,000円)
3	広沢西院流御室相承 金剛界次第 解説	仁和伝法所 編	6,000円(本派5,000円)
4	広沢西院流御室相承 護摩頸次第 解説	仁和伝法所 編	6,000円(本派5,000円)
5	広沢西院流御室相承 胎蔵界次第 解説	仁和伝法所 編	6,000円(本派5,000円)
6	南山進流声明集 —理趣三昧篇—	潮弘憲 監修 仁和伝法所声明研究会 編	8,000円
7	南山進流声明集 —大般若会篇—	潮弘憲 監修 仁和伝法所声明研究会 編	8,000円
8	智満流梵字悉曇習字帖	森祐敬 編著	2,500円
9	仁和寺研究 第6輯	仁和伝法所 編	3,300円

1～7は僧籍をお持ちの方にのみ頒布いたします。刊行物をお求めの方は仁和伝法所までご連絡下さい。

仁和伝法所所報 第6号

令和8年8月31日発行(非売品)

編集・発行 総本山仁和寺 仁和伝法所
〒616-8092 京都府京都市右京区御室大内33
E-mail denposho@ninnaji.jp
URL <https://www.denposho.com>
X (旧Twitter) @ninna_denposho

印刷：株式会社アートナビ



仁和伝法所所報

Bulletin of Esoteric Buddhism Research Centre, Ninnaji Temple